

大阪教区伝研の会 研修旅行 旅行記

十二組 勸正寺 長谷正利

近年、三重といえば「美味し国・三重」のイメージをお持ちになる方も多いと思います。山海のご馳走・珍味はもちろんのこと、松阪牛に伊勢うどん、手こね寿司、赤福餅を筆頭に丁稚羊羹・安永餅・へこきまんじゅうといった甘味の多いこと。最近ではニンニクの効いたタレのかかった「四日市トンテキ」なるものがB級グルメとして非常に有名なのだとか……とまあキリがないほどに出るわ出るわ美味しい物の数々。名物の多い背景には、お伊勢参り・京参りの道中でもある東海道の宿場が多かった事が大いに関係があったようです。日本橋側から順に「桑名宿（桑名市）」「四日市宿（四日市市）」「石薬師宿（鈴鹿市）」「庄野宿（鈴鹿市）」「亀山宿（亀山市）」「関宿（亀山市）」「坂下宿（亀山市）」と三重県だけで7つも宿場があったわけですから「美味し国」というのも当然の事なのかもしれません。

今回の研修旅行では江戸時代、五十三ある宿場の中でも最も栄えたと言われている「関宿」から訪ねていきます。国道は国道でも「酷道」で有名(?)な名阪国道を進んで「鈴鹿峠」を越えた所から研修旅行の舞台「三重・長島」に入っていきます。

〽関宿（東海道四十七番宿場）〽

亀山市内に入りますと「カメヤマローソク」の看板がアチラコチラで見受けられます。



関宿は東西約二キロにわたって江戸時代の町家が並びます。鈴鹿山脈を背景とした宿場内では、街道に面した電線が取り除かれており、江戸時代と同じ光景が再現されています。格子戸の下には馬繋ぎの鉄の輪があったり、おそらく遊郭があったことを思わせる二階屋の格子戸が艶っぽく、銀行や郵便局も町の雰囲気

溶け込んでいます。(ATMは「現金自動取扱所」と表記されています)途中に鈴鹿峠をバツクに記念撮影できるスポットがあり訪れる人を楽しませてくれます。一本道の街道なので迷子になることもなく、それぞれ思い思いの時間を過ごしました。

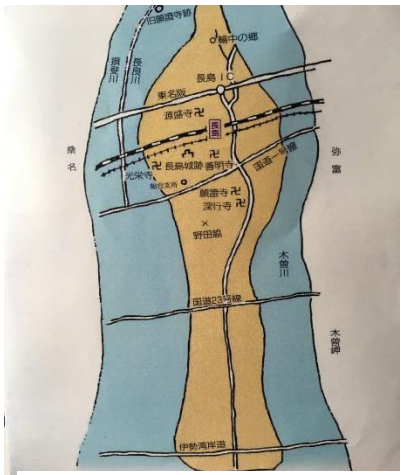


街道には電線・電柱は一切ありません。

この日は貸切状態♪

〔長島・願證寺〕

宿泊地が南四日市市なので長島まで北上。道中東側には日本で最初に形成された大規模石油化学コンビナートが見えてきます。桑名市に入り員弁川・揖斐川を越えると「輪中の郷・長島」に到着。輪中とは川の水面より低く周りを堤防に囲まれた島、または水防と治水のために組織された共同体のことを言います。その地形を大阪で例えると大川・堂島川に挟まれた中之島に似ているのですが、その規模は全然違います。木曾川・長良川・揖斐川の三つの大河が一つに交わる木曾三川河口部に浮かぶ島。明治に入り本格的な治水工事が始まるまでは常に水害に悩まされた土地でした。



治水工事が終わった現在の長島輪中



長島一向一揆の頃の長島輪中

戦国期にあつてこの外的防御に優れた自然の要塞であつた長島の地は三河・尾張・美濃の三方国にまたがり、この地方に大きな勢力を擁していた真宗教団としても、さらに伊勢地方へ勢いを拡大していく上で好都合の地でもありました。また、信長にとつても長島の地は、石山本願寺を手中に収めるためにはどうしても手に入れたい場所であつたようです。というのも織田軍率いるおよそ十万の兵の中には武器を運ぶもの、飯を炊くもの、馬の世話をするもの、これらの兵を休ませる・物資を補給する役割で寺内町でもある長島の場所は抑えておかなければならない要所だつたようです。

今回訪れた「願證寺」は千五百年頃には事実上この地方の支配権を握る場所でした。戦国動乱の落ち武者や百姓たちが願證寺を頼つて多く集まり、ますます勢力を拡大していきます。その当時信長と激しく対立していた石山本願寺から信長に対抗して決起するように、と檄文が諸国の門徒に届き、願證寺もこれに呼応して信長軍に抵抗します。

その頃の願證寺住職の証意(蓮如上人のヒヒマゴにあたる)が長島城主となり、多くの端城を築き、また地の利を生かして猛威を奮います。二度に渡る信長軍の長島攻めを退けるのですが、長島輪中を攻めることの困難さを思い知らされている信長は、既に織田方に帰服している志摩・九鬼水軍をはじめとした船団で城や砦を取り囲み、兵糧攻めに打つて出、三ヶ月に渡る籠城戦が続きますが天正二年(一五七四年)九月二十九日ついに落城します。

『信長公記』(太田牛一著)によると次のように記載されています。

「九月二十九日 長島城は降伏を申し出て信長はこれを許した。生き残ったものは船に乗り城から退散した。しかし信長の鉄砲隊に岸から狙い撃ちされ、多くは川中に落ち、大川は死者の血で真っ赤に染まった。また最後まで残っていた屋長島・中江城の者たちは、城の周りに幾重にも柵を設けられ四方から火を放たれ、女・子どもも共に生きながらにして焼き殺された。」

三度に渡る長島一向一揆は最終的には信長軍の勝利に終わるのですが、何故ここまで大きな規模の戦になったのか。ご住職のお話によると「阿弥陀仏の浄土に往生させていただくのだ」という民衆の信仰心の強さの表れでしょうと。そしてその信仰心が大きくなった一端には、当時の「平均寿命」が関係あるのでは、とお話くださいました。自分の死を考えるタイミングが今の人よりも早かったのではと。(平均寿命四十五歳) この話を聞いて、以前の仏青研修旅行で広島・竹原の長善寺の前住職から石山合戦のお話をいただいた後、「進者往生極楽 退者无间地獄」の旗を見せていただいたことを思い出しました。「当時の民衆の間では死後往生の考えの方が一般的だったのかもしれないし、だからこそお寺が教化に励まないといけないのではないだろうか。ご門徒のお話・相談に耳を傾けないといけないのではないだろうか。以前本山の歎異抄講座を終えた身で、今度は桑名組で歎異抄講座を開いたら満堂になったんです。人って求めているんじゃないですかね。時代が求めているのがそこなんやろなあ」(願證寺・住職談) 合掌。



広島県・竹原の長善寺にて

「進者往生極楽 退者无间地獄」の旗